東京新聞賞

ヘンクツ顔はムスビの顔

後藤　大輝

「隣の家がいつも魚焼いてっから…におい、気にならなけりゃ、いいところだ」

一昨年の六月。長く降り続いた雨がようやくやんだ日。墨田区京島に僕は古い一軒家を格安で借りた。案内してくれた商店街のおじさんは、ミシミシ軋む床をおそるおそる踏みながら「長いこと空き家だったからなあ」と言った。「自分達で直すつもりなんです」そう答えると、おじさんは、若干、あきれた顔をして外国人みたいに肩をすくめた。

京島は東京の空襲の災禍を逃れた町だ。

複雑に入り組んだ路地には古い家が軒をつらねている。木造長屋も所々に残り、職人家業が多いこともあり、人の手垢が香る、いわゆる東京の

下町。

知り合いの建築家から、最近、増えてきた空家を安く借りられる事を聞いた。条件は家と町の雰囲気を残す事、リフォームを自分たちの手で行う事…「面白そうだ」と言う仲間を募って、商店街の端にある木造長屋に住む名乗りをあげた。

初めに天井を抜くと驚いた。今にも崩れそうに見える、心もとない外観からは想像しなかった太い木の梁が、しっかりと組まれていた。関東大震災後に建つ築80年は伊達じゃなかった。木材の間から新聞紙が出てくる。昭和21年。押入れの床下からは昭和40年の新聞紙。何度も行なってきた修復、改装の歴史がうかがえた。部屋を広く取るため壁も壊す。二階はトイレットペーパーが転がる程に傾いていた。新しい床を水平に張直す。休日は全て大工作業にあてた。住処を自ら作っていく創作の実感はとても心地いい。インパクトドライバーや電動丸ノコも手に馴染みだした。素人の僕たちは海パン姿でそれを行なっていた。冷房など無い、

トタン家屋の夏は凄いのだ。

何か妙な事をやってる人がいる。そんな噂がたっていたみたいだ。次第にご近所さんが見物に来るようになった。「暑い昼間から…よくやるよ」と笑う。

「ここは、昔、スナックだったんだ」差し入れのアイスクリームを一緒に食べながら、まだ残っている一階のカウンターを指す。「いい店でさ、ここにカラオケがあって…」と説明してくれる。僕たちはカウンターを残す事に決めた。

夏も終わる頃になると、家の中もだいぶ快適に暮らせるようになっていた。下町の雰囲気にも慣れた。引越してきた頃には、当然のように行われる挨拶にも、すこし、戸惑ったものだ。今では、突然、揚げ物屋のおばさんから「おかえり！」と言われても「ただいま！」と返すようになった。家の軒先で知り合いの夕食のおかずを味見するし、朝、窓を開けて隣の人と顔が会ったら、天気の話だってする。

同時に下町がかかえる問題も見えてきたのだった。例えば、高齢化。少子化。「町」が「街」へとすこしずつ変わっていく中、住人達が漠然ながら感じる不安。どれも深刻な事であるだろう。けれど、僕は、実際の体験を通じて言える事がある。それは、京島の人達は、古いモノが新しいモノへと変わる事を恐れてはいない、という事だ。古いモノがすべて良いモノだとは限らない。新しく変わる事で改善されるモノがあるならば、喜んでこの町は吸収するだろう。その上で、残すべきモノは、やはり、ある。失ってはいけないモノ。伝えていくべきモノ。

問題は緩やかな「交替」の接点をどう作っていくのか、という事なのだ。

昨年の八月頃。僕たちが住む家を知り合いのおばあさんが訪ねてきた。ふとした会話の中からその話は出てきた。

「京島文化祭」は、毎年、十一月に行われている。商店街が主催とな

っている文化祭は東京都で唯一のものだ。習字や焼き物、手芸品などの展示がされたり、朝市がでたりする。公民館ではイベントもできるけれど、「あんた達、何かやってみない？」と誘われたのだ。僕たちが考えたのは、京島に住む老人と子供をつなげる、というテーマ。

まず「町の昔、あなたの昔」という題目で十五人の老人のインタビューをビデオで撮影する。お年寄りの家に僕たちがうかがい、街の昔の回想と、彼らの人生を支え、その仕事で得たものについて取材する。また、京島の子供たちを集め「町の今」として、子供たち自身にカメラを持たせて、現在の町で見えるものを子供の視点で撮影させてみた。

それを一本の映像作品として繋いでいく、という試み。

企画は難航した。対象者を十五人と決めたはいいが、江戸っ子で職人気質の町の事だ。インタビューに答えてくれるお年寄りを見付けることは難しい。作品の上映は商店街の中心にある公民館でおこなった。実は、完成が文化祭の当日に間に合わず、実行委員には大きな迷惑をかけてし

まった。それでも、上映前に挨拶をすると拍手が起こった。パイプ椅子で作った客席には、親子連れや商店街の店主、作品に登場してくれた人たちの顔があった。照明が落ちてプロジェクターのランプを入れる。初めに映し出されたのは夕方の商店街。そして声。

「そうよなあ…もう昔の建物はなくなっちまったなあ」語っているのは引退した鳶の親方。京島の町を自ら案内して回る。戦争の話。あちこちであがった火の手を消していった話。ふと、なんでもない十字路で足を止める。「ここは池だった。東京都のゴミで埋めたんだぜ」

91歳で現役のチンドン屋さんは化粧しながら語ってくれた。「のん気で気楽にやってきた」

自分の仕事について「いい仕事、最高の仕事」と言う。「でも、若い人がやりたい、って言ってきたら『つまらない仕事』って言うけどね…」そして淡々と化粧を終えていく。

金属工芸店の店主は子供の頃の京島の縄張りと勢力図について語って

いく…。

次々と映し出される町の重鎮の中で、当初、僕たちの顔見知りは三人だけだった。困っている僕たちを見かねて助けてくれたのが梅おばあ。「私は取材されるのはご免だけど、面白い人達が周りにはいるよっ。」と次々と僕たちに昔馴染みを紹介してくれたのだ。

のしのしと睨みをきかす顔つきで歩く梅おばあに着いて町を歩いていく。「あの人にも頼んじゃうかっ」と唐突に手を挙げる梅おばあ。その先には、家の前でバットを振って立っている大工さん。半ば強引に話を聞いている最中にも、五件程先に梅おばあの眼はのびている。「聴いてやってよ、ちょっとっ」と走っていく。若い時分は町のガキ大将だったとう灯油屋さんに、僕たちはベーゴマを教えて下さいと頼んだ。「梅原の姉さんに言われたんだよお」と、通りかかる人達に恥ずかしそうに弁明しながらも、ワイワイ群がってくる子供達にベーゴマの使い方を教えてくれた。

スクリーンの中で梅おばあが喋っている。
元メッキ職人の梅おばあはメッキの技術について語っている。「パチンコ玉から女物のコンパクトまでなんでもやった。きれいだったなあ…」
取材の最後に「どうしても」と頼んで刻印職人の旦那さんと一緒に撮影したのだ。
一通りお年寄りの映像が続いたあと、子供の撮った映像も映された。街並みが映されたのも暫くの間だけ。そのうち仲間を撮り合って、ふざけ遊ぶ姿もそのまま使った。暗がりの中で客席を僕は見渡した。知り合いの姿が映されるたびザワザワと声があがる。正直に言って、上手くまとまっているとは、到底、言えない作品だと思う。けれど、こうして、この小さな会館で皆で見ている間は、互いに何かを通じ合えているんじゃないか…そんな事を下を向きながら考えていると、パッと電気がついた。上映が終わったのだ。途端に猛烈に恥ずかしくなる。拍手が起きているけれど、顔があげられない。魔法の時間は終わったのだ。梅おばあ

が冗談めかして「まったく皆で私の事を笑いものにしやがって」と言った。会場に再び笑いが起こった。

その後、帰っていく皆に一言ずつ声をかけてもらった。急にガランとした会場を片付けて外に出ると、すっかり、日も暮れていた。京島の商店街は早くに閉まる。シャッターが既におりた通りを家に帰る途中で、尻をパチンと蹴られた。撮影に参加してくれた子供の中でも一番やんちゃな小僧が走って逃げていく。急に振り返って、僕の顔を、しっかりと見て、「ここ、オレの町！」と宣言すると、またパタパタと忙しく逃げていく。木枯らしが吹いて、すっかり冬だなと思って、それでも、なぜか全然寒さは感じなくて、ふと、この先、この町で老人になるのもいいかな、とそんな事を考えた。